町長ひとりごと ⑯

斉藤 譲

春に思う

今年は桜の開花が、ことのほか遅れた。わが家にたった一本ある桜が満開になったのは、四月も半を過ぎた頃であった。この桜は、娘が小学校へ入学したのを記念して植えたもので、かれこれ十数年が経ち、今ではだいぶ幹も太くなり、枝も四方に大きく張り出して、このところ毎年見事な花を咲かせている。

ふだんは粗雑で猫の額ほどの庭にも、花桃や水仙、椿などの色とりどりの花が咲き、春はそれなりの華やかさを演出してくれた。まさに春の恵である。そんなある日の日曜日、無骨者の私が、花の美しさに浮かれて、花の下で茶会と洒落こんだ。茶会といえば聞こえはよいが、何のことはない蒸した芋と駄菓子を食にした、ただの茶飲みである。汗ばむほどのやわらかな春の日差と、風に舞う花吹雪を浴びながら啜るお茶の味はまた格別で、暫うららかな春の香に酔った。人は誰でも、見知らぬ大自然への憧れと夢を抱き求めている。しかし、案外ふだん目にしているこんな庭先の小さな自然の中にも、驚くほど大きな感動が隠されていることを見過していることが多い。

▼現代に生きる私達は、世の中のめまぐるしい変化に惑わされて、心の安らぎを失ない、いたずらに正体のない幻影を追い求め、限りある人生を無為に遣り過してはいないだろうか。急速な国際化、情報化社会の到来は、私達に広い世界の存在とかかわりを認知させ、日々の生活に著るしい利便性をもたらした。しかし、その一方では特に農村社会の長い伝統や生活習慣、連帯意識を次々に破壊していった。その結果、人々は個人主義に埋没し、情報を頼りに先へ先へと思いを募らせるあまりに、逆に足元を暗くしていった。曾つて、農家の縁側は、近所のお年寄りが三三五五集い、茶会を開く社交の場、情報交換の場であった。お互いの体の具合い、集落内の出来事、行事のことなどをお茶を飲みながら語り合い、その情報がその日のうちに各家庭へ伝えられることになるのである。私も子供の頃、祖母が毎日それを語るのを聞いて育った。また農繁期ともなれば、野良に働く人々が、近くで働く人達を誘い合って、畔で茶飲みをする光景が、あちこちでみられた。ラジオから流れる「昼の憩い」のメロディを彷彿させるような、のどかな農村風景であった。

▼それがいつしか縁側からお年寄りが消え、田園から茶飲み風景も消えていった。それは、農村の兼業の進行とともに始まったような気がする。経済が発達すればするほど農業などの第一次産業から製造業などの第二次産業へ、更にサービス業などの第三次産業へと就業の構造は高度化していく。いま町内の専業農家はごく一握りに過ぎず、この人達とていろいろな作目を組み合わせた複合経営であるから、年中忙しく仕事に追われている。また農業から離れて他産業で働く人達は、職場の規律にはめ込まれて、目標に追いかけられているのである。従って、人々は好むと好まざるとにかかわらず地域的な繋りを捨て、より仕事中心の利益的な人の繋りを重視するようになった。それ故に、サラリーマン家庭の悲劇も生まれる。ご主人は朝早く家を出て、毎晩のように残業や接待などで遅い帰宅、たまの日曜日に家庭サービスをと家族が期待すれば、その日は接待ゴルフとくる。これでは、とても健全な家庭とはいえない。最新、広範な情報をふんだんに持つ人が、実は生活の根拠地である家庭や周辺社会の情報は一片も持ちあわせていないという、地域社会と断絶した人間がいま急増しているのである。利害にかかわりのない隣近所の人間同士の繋りを大切にする地域社会の実現こそが、豊かな生活大国を築く基礎でなければならないはずだ。

▼それにしても、長く「向う三軒両隣」の社会に生きてきたお年寄りの目には現在の世相はどう映っているのであろうか。思いもしなかった個人主義という目に見えない壁に戸惑ってはいないだろうか。近所のお年寄りのところへお茶飲みにでも出かけようとしたとき、息子や嫁の目に、迷惑をかけるから止せという気配を感じて、思わず尻込をする者はいないだろうか。そうであってはいけない。高齢社会の急速な進行を考えたとき、縁側の茶会をぜひ復活して欲しいと願っている。特に、病む年寄りのいる縁側には、なお更のことである。病む者にとって、そこに集う仲間の一声は、名医にも勝る治療法であり、また最高の老人福祉活動だと私は思っている。